

盛岡城遠曲輪跡

第 15 次発掘調査報告書

2015 年 3 月 31 日

平 井 明 子

盛岡市教育委員会

盛岡城遠曲輪跡

第 15 次発掘調査報告書

2015 年 3 月 31 日

平 井 明 子

盛岡市教育委員会

例 言

- 1 本書は平成 26 年度に実施した、盛岡市神明町 1-1 に所在する盛岡城遠曲輪跡第 15 次発掘調査報告書である。
- 2 この調査は土地所有者平井明子氏が実施する共同住宅の建築及び駐車場造成に伴う発掘調査である。
- 3 この発掘調査は、平成 26 年 7 月 16 日事業主平井明子氏と盛岡市教育委員会との間に締結された埋蔵文化財に関する協定書に基づき、盛岡市遺跡の学び館が発掘調査を実施し、報告書を編集・作成した。調査から報告書作成の経費は、土地所有者であり事業主である平井明子氏が負担した。
- 4 本書の執筆と編集は、盛岡市遺跡の学び館室野秀文、神原雄一郎、佐々木紀子が分担して行った。

- 5 調査地の座標値は、日本測地系公共座標第 X 系を座標変換して標記した。

$$\begin{aligned} \text{盛岡城遠曲輪跡 調査座標原点 } X - 32000.000 &= R X \pm 0.000 \\ Y \pm 0.000 &= R Y \pm 0.000 \end{aligned}$$

- 6 高さは標高値をそのまま使用した。
- 7 遺構の略号は次のとおりである。

(1) 城郭期 (概ね 16 世紀～19 世紀)

遺 構	略 号	遺 構	略 号	遺 構	略 号
建物跡	S B	柵・柱列等	S A	竪穴建物跡	S I
堀・溝等	S D	土 塁	S F	土 坑	S K
井 戸	S E	通路等	S H	その他	S X

(2) 城郭期以外

遺 構	略 号	遺 構	略 号	遺 構	略 号
竪穴建物跡	R A	土 坑	R D	溝	R G

- 8 発掘調査及び整理作業にあたり、次の方々から有益な御指導と御助言をいただいた。
岩手県教育委員会、神山仁 (日本城郭史学会)、菅野文夫 (岩手大学)、菅野敏子
- 9 発掘調査による出土遺物及び諸記録は、盛岡市遺跡の学び館で保管している。

目 次

I	遺跡の位置	1
II	調査経過	2
III	調査成果	4
1	基本層序と遺構確認状況	4
2	古代の遺構	4
3	城郭期及び城郭期以後の遺構	7
4	出土遺物	11
IV	総括	19

挿図目次

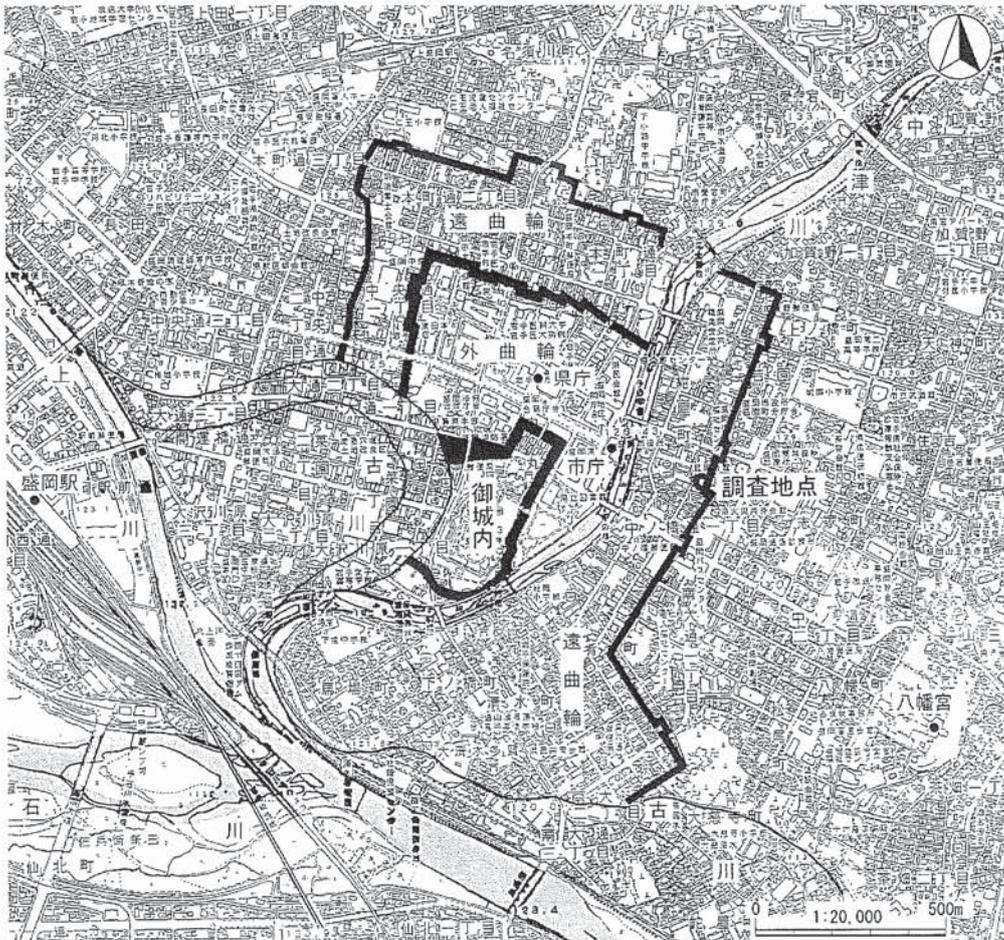
第 1 図	遺跡位置図	1
第 2 図	調査区位置図	5
第 3 図	古代の遺構	5
第 4 図	RA01 竪穴建物跡	6
第 5 図	城郭期の遺構	8
第 6 図	遺構土層断面図	9

図版目次

第 1 図版	調査区全景
第 2 図版	土塁
第 3 図版	土塁
第 4 図版	堀
第 5 図版	SD402 暗渠排水溝
第 6 図版	古代の遺構
第 7 図版	古代・近世の土器
第 8 図版	焜炉
第 9 図版	中国染付・色絵、瀬戸・美濃、唐津、信楽
第 10 図版	近世陶器、肥前染付

I 遺跡の位置

盛岡城は慶長2年（1597）3月6日、南部信直（盛岡藩祖）が嫡子利直（初代藩主）に命じて築城を初めた（註1）。藩政時代初期には三戸城（青森県三戸町）、福岡城（岩手県二戸市）、郡山城（岩手県紫波町）を居城としながら築城が進められたが、寛永10年（1633）5月に2代藩主南部重直が入城して以来、明治の廃藩置県に至るまで、盛岡藩庁として存続した。城の中で御城内と呼ばれた内曲輪は、旧北上川と中津川の合流点の丘陵に築かれ、本丸、二ノ丸、三ノ丸、腰曲輪は石垣を備えている。この北側、現在の内丸地域には外曲輪があり、藩主居館の御新丸や南部家重臣の屋敷が存在した。外曲輪のさらに外側には土塁と堀を廻らせた遠曲輪があり、外曲輪の北側、西側と、中津川対岸地域を廻っていた。慶長14年（1609）から慶長17年（1612）にかけて、中津川には上の橋、中の橋、下の橋が架けられた。おそらくはこのころまでに城下の整備が進み、外曲輪や遠曲輪の構築が終えられたと推定される。正保4年（1647）幕府へ提出した「奥州盛岡平城絵図」⁽²⁾には遠曲輪の土塁、堀が描かれており、加賀野惣門付近に「堀口広五間、深二間、水少有」と記されている。



第1図 遺跡位置図

調査地点の地番は盛岡市神明町1-1で、盛岡城本丸から東北東に約600m、中津川対岸の遠曲輪東辺の中央部に位置する。江戸時代には町人町の葺手丁に属し、調査地点には江戸時代中期以後に感應山神通寺三明院（修験宗）が調査直前まで存在した。三明院平井氏の祖先は源氏の旧臣で、本尊の延命普賢菩薩は、治承4年に源頼朝が貞純親王から伝来の金剛宝珠をもって、仏師運慶・鋳物師珍華に奉鑄させて護持仏とした仏像と伝えられている。その後永禄年間（1558～1570に）平井五郎友政（具代法善坊）が足利家の乱を避け、尊像を奉持して鎌倉から東海道を西上し、友政の子友直が二代目法善坊となり、回国修行しながら元亀元年（1570）に糖部三戸に至った。ここで修験道を説いて多くの帰依者を集めたという。寛文2年（1662）四代目法善院のときに三戸から盛岡城下へと尊像を奉遷して山伏小路（現在の梨木町西部）に安置されたが、寛文11年（1671）年には加賀野村に移転した。法善院は歴代藩主の信仰が篤く、四代法善院は御祈願職を仰せつけられ、藩主の代参も行われていた。享保14年（1729）盛岡大火によって本尊諸仏を残して灰燼に帰したが、宝暦3年（1753）藩主南部利雄の帰依により現在地に再興したという。享保14年には聖護院門跡忠誉法親王（忠篤親王）から三明院の院号を允許され、盛岡三十三観音、弘法大師陸中八十八箇所所札所として領民の崇敬を集めていた（吉田六太郎1978、盛岡仏教会1995）。

II 調査の経過

平成26年2月、土地所有者の平井明子氏から、三明院の本堂と庫裏などの建物を解体して共同住宅を新築したい旨の協議があった。この場所は埋蔵文化財の盛岡城遠曲輪跡に該当し、境内の微地形でも土塁と堀の痕跡らしい緩やかな起伏が認められることから、土塁や堀の残存が予測され、建築前に埋蔵文化財の発掘調査が必要であることを伝えた。同年3月25日付で発掘届けが提出された。寺院建物は平成26年6月中に解体除却することになり、その後に埋蔵文化財の有無を確認するための試掘調査を実施することになった。試掘調査は平成26年7月2日から7月3日に市費で実施した。調査は計画建物の北側、南側の柱筋に試掘トレンチを4箇所設定し、土塁の盛土や堀について確認を行った。また、共同住宅南側の駐車場部分についても造成工事が予定されていることから、この部分についても遺構の有無を確認した。試掘調査の結果、寺の本堂、庫裏が存在した位置の高まりは土塁の基底部分であり、東側の道路沿いの低みは土塁に併走する堀の一部であることが確認された。さらに土塁の下層からは平安時代の土坑や溝が確認された。このため共同住宅と駐車場の施工前に本発掘調査が必要となった。開発内容から事業主負担で発掘調査を実施することとし、現地調査は7月17日から8月30日までの予定で実施した。発掘調査は南半部分の駐車場予定地から開始した。ここは駐車場造成により掘削される深さまでを遺構精査とし、土塁下層の古代の遺構や、土塁よりも深い堀については保存することとし、精査していない。8月4日からは調査区北半部分について調査のため、重機で土砂を反転して表土除去し、土塁と堀の精査に入った。その結果土塁はその全幅を確認し、その基底部分は地山を削り出して造られており、この上に盛土で土塁が築かれていることが判明した。土塁東側の堀は、東半分は現在の車道下になるため、堀の西壁部分だけの精査となった。掘削を進めると地表から2m掘り下げたところで湧水があり、道路側の土砂の崩落の危険があったため、堀底までの精査を断念した。一方土塁西側の郭内では江戸時代後期ごろの土坑群が確認された。この部分では

明治以後の盛土層が厚く堆積し、現在の地表から1.4mまで下がった。ここには湿潤した低地の一部が確認され、そこから土塁下を隧道で堀まで貫通させた暗渠排水溝（SD402）と、それ以後に土塁を断ち割って構築した暗渠排水溝（SD401）が確認された。試掘調査時の建物南側のトレンチは、このSD401排水溝にほぼ重なっている。さらに土塁の下層に存在する平安時代の竪穴建物跡（竪穴住居跡）や土坑群などを調査した後、8月30日にすべての現地調査を完了し、機材を撤収した。

調査終了後、9月から平成27年1月初旬まで遺構図面整理と遺物整理を進め、平成27年1月中旬から発掘調査報告書作成にとりかかり、平成27年3月末日に本報告書を刊行した。

調 査 要 項

- 1 調査遺跡名 盛岡城遠曲輪跡 (第15次調査)
- 2 調査地の所在地 盛岡市神明町1-1
- 3 調査原因 共同住宅建築及び駐車場造成
- 4 事業主 平井明子
- 5 調査期間 発掘調査 平成26年7月17日～同年8月30日
整理作業 平成26年9月1日～平成27年3月31日
- 6 調査面積 580 m²
- 7 調査体制

盛岡市教育委員会 教育長 千葉仁一	教育部長 鷹觜徹	教育次長 豊岡勝敏
○ 事務局	○ 遺跡の学び館	
歴史文化課長 袖上 寛 (遺跡の学び館長兼務)		
課長補佐 木村英樹	館長補佐 北田牧子	
岡 聡	副主幹 菊地幸裕	
今野公顕	室野秀文 (調査担当)	
権頭祐子	田山淳一	
佐々木亮二	津嶋知弘	
寺島幸子	神原雄一郎	
大沼信忠	花井正香	
佐藤美沙	千田和文	
鳥取邦美	木幡里美	
千葉茉耶	山岸佳澄	
齊藤晃大	山野友海	
	鈴木俊輝	
	樋下理沙	
- 発掘調査・整理作業

阿部正幸	阿部有子	天沼芳子	岩根陽子	内山陽子	及川京子	長内理恵	帷子真由香
久慈玲子	熊谷あさ子	小松愛子	佐々木紀子	佐野光代	平舘聖	竹花栄子	千葉留里子
中村昇	永沼光子	西田千佳	袴田英治				
- 調査協力

積水ハウス株式会社岩手支店	樋下建設株式会社
---------------	----------

Ⅲ 調査成果

1 基本層序と遺構確認状況（第2図～第7図）

調査区の調査前の地表面は標高 127.7m～128.3mである。東側の堀の壁面の地層は、標高 126.4m 付近を境に、上は褐色ないし黄褐色シルト層（Ⅲ層）、下は中津川によって堆積した砂礫層（Ⅳ層）であり、平安時代の遺構はこのⅢ層の上面から掘りこまれている。平安時代遺構の上を黒色土層Ⅱ層）が 15cm から 45cm の厚さで覆っており、この上に遠曲輪の土塁（SF400）が構築されている。この土塁の東側は遠曲輪の堀（SD400）が掘り込まれている。また土塁西側の郭内は、Ⅲ層の下部ないしⅣ層上面まで掘削・削平されており、この部分では平安時代の遺構は残存せず、江戸時代後期以後の遺物包含層で覆われている。したがって土塁基底部は基壇のように削り出されており、土塁本体はその上に盛土し、構築されていることが判明した。郭内側にはSK01～05土坑があり、調査前の地表面から 1.4m～1.5m 低い。この低い面が周辺のどこまで及んでいるのかは分からないが、調査区西側の郭内から土塁の下の暗渠を通じて排水するSD401・402排水溝が確認されている。この上部には江戸時代後期以後の遺物包含層が形成されている。

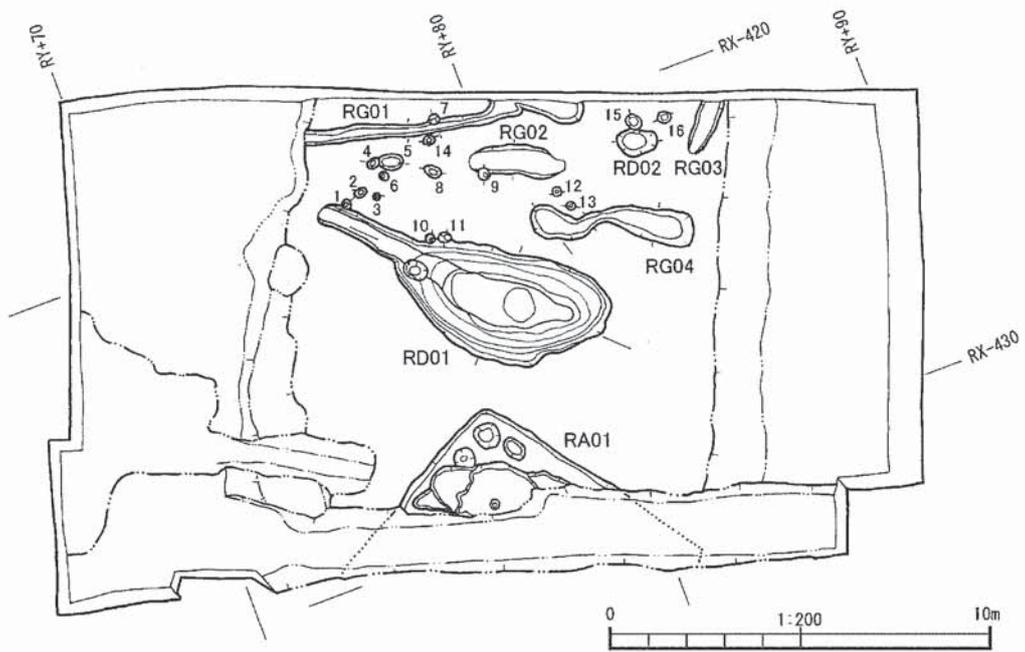
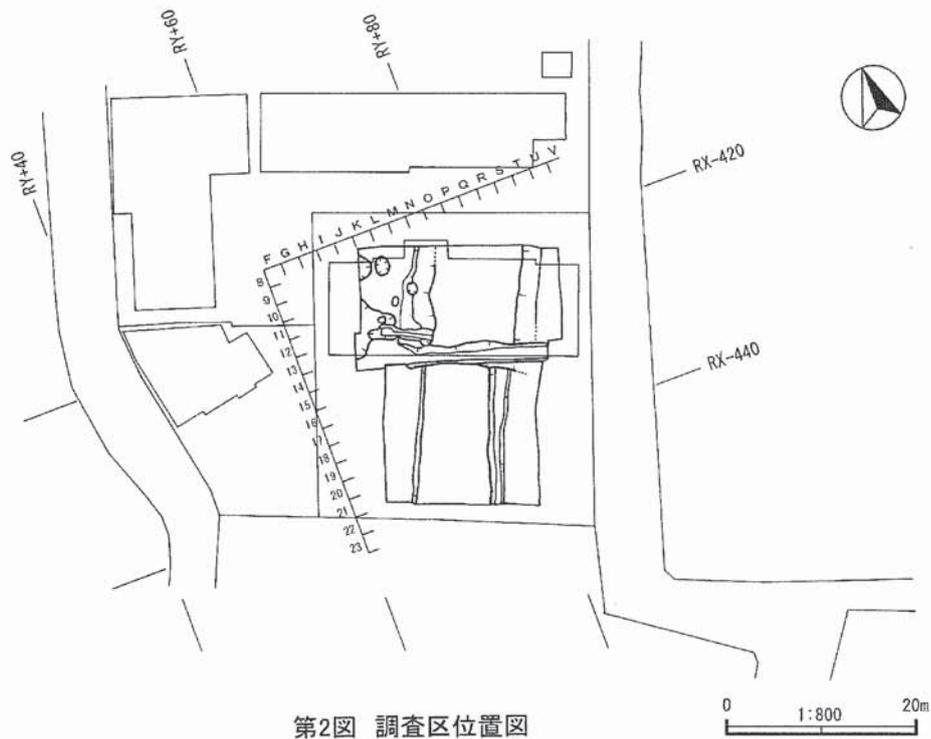
今回の調査では北側の共同住宅建物部分については古代の遺構まで掘り下げて調査を実施したが、南側の駐車場部分では、工事計画では掘削が土塁の盛土層下面辺りまでとなっていたため、工事によって削り取られる部分に限定して調査を実施した。したがって調査区の南側部分は土塁盛土層までの調査であり、土塁基底部や堀、土塁の下層に存在する古代の遺構については未精査である。以下、古代の遺構、城郭期（近世）の遺構の順に調査成果を報告する。

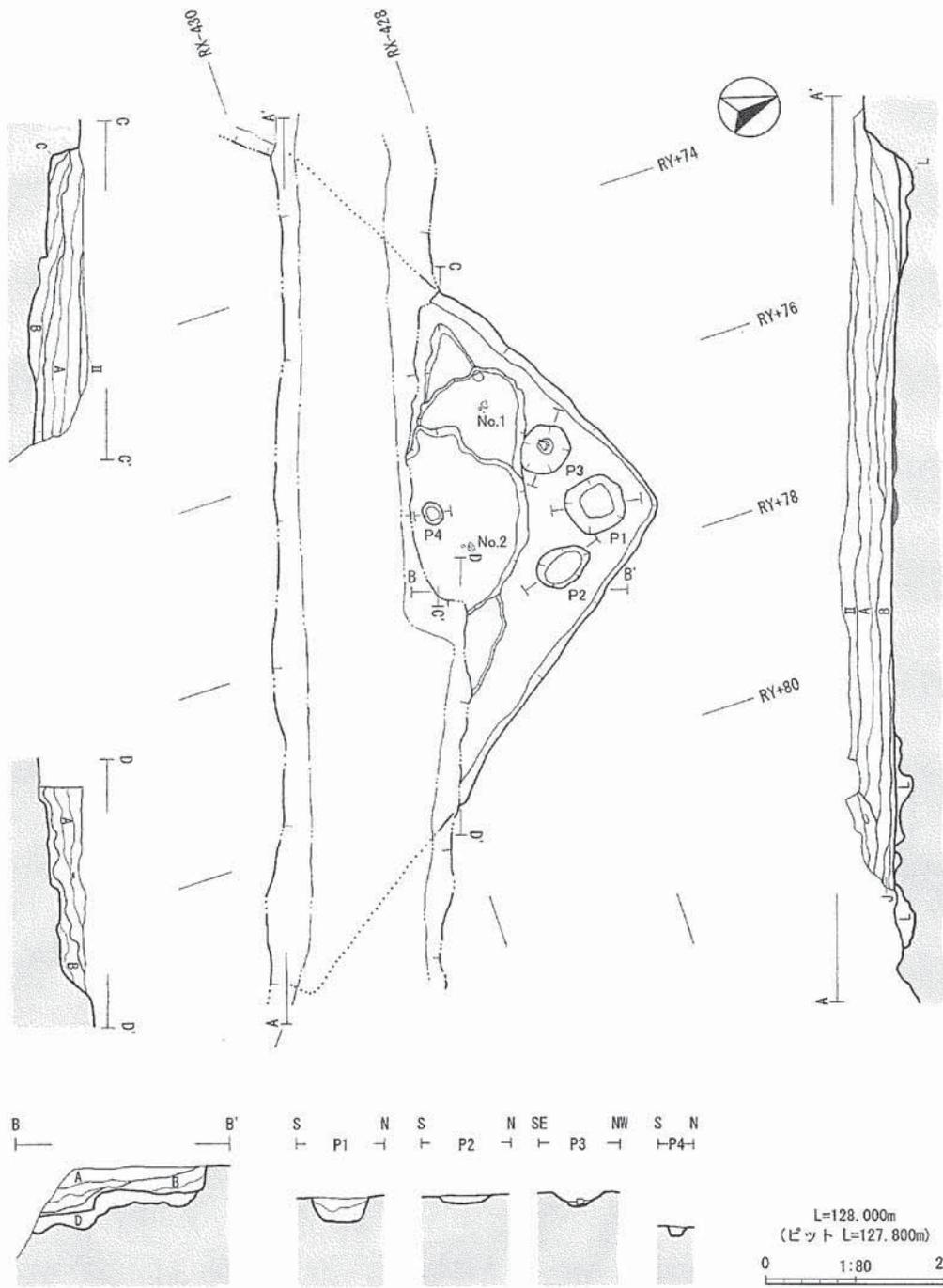
2 古代の遺構（第3図・4図・7図、第6・第7図版）

RA01 竪穴建物跡

この竪穴建物跡は後述するSD401排水溝によって大きく掘り割られており、竪穴建物の北側の一部を確認した。竪穴の南半部はSF400土塁の下になっているため、正確な規模は不明であるが、土塁の土層断面において、竪穴の南東壁近くに焼土粒の混じるカマド崩壊土（J層）が確認されたことにより、竪穴建物の主軸はS31°Eを示し、北東壁は6.4m以上。北西壁は5.8m以上で、一辺が6.5m程度の隅丸方形プランの竪穴建物跡と推定される。壁高は30cm内外で、床面はほぼ平坦ではあるが、SD402排水溝の随道上部の床が15cm～23cm陥没して低くなっている。壁近くのところは床面よりも10cm～20cm掘りこんで床構築土（D層）を詰めている。壁溝はなく、柱穴は北東壁と北西壁から2mの位置に1口（P4）確認された。他に北隅近くに3つの浅い穴（P1～P3）が存在する。また、床中央部に東西1.6mにおよぶ焼土の浸透が認められた。竪穴の埋土は全て自然堆積であり、A層は黒褐色土主体でA2層には灰白色火山灰（十和田a火山灰）が塊状に混入する。B層は黒褐色土主体で暗褐色土が混入。C層は壁の崩壊土で黒褐色土と褐色シルトの混合土である。

遺物は埋土のすべての層から平安時代の土師器、須恵器、赤やき土器の破片が出土しているほか、





第4図 RA01竖穴建物跡

床面から第7図1、2の土師器坏、床面の陥没箇所から4の土師器高台付坏底部が出土した。

土坑・溝・柱穴状ピット

RA01 竪穴建物跡の北側に RD01 土坑と RD02 土坑、RG01～RG04 溝、P1～14 の柱穴または柱穴状ピットが確認された。土坑、溝の埋土は黒褐色土主体の自然堆積である。RD01、02 土坑、RG01、02、04 溝から、平安時代の土師器、須恵器、赤やき土器の破片が出土している。

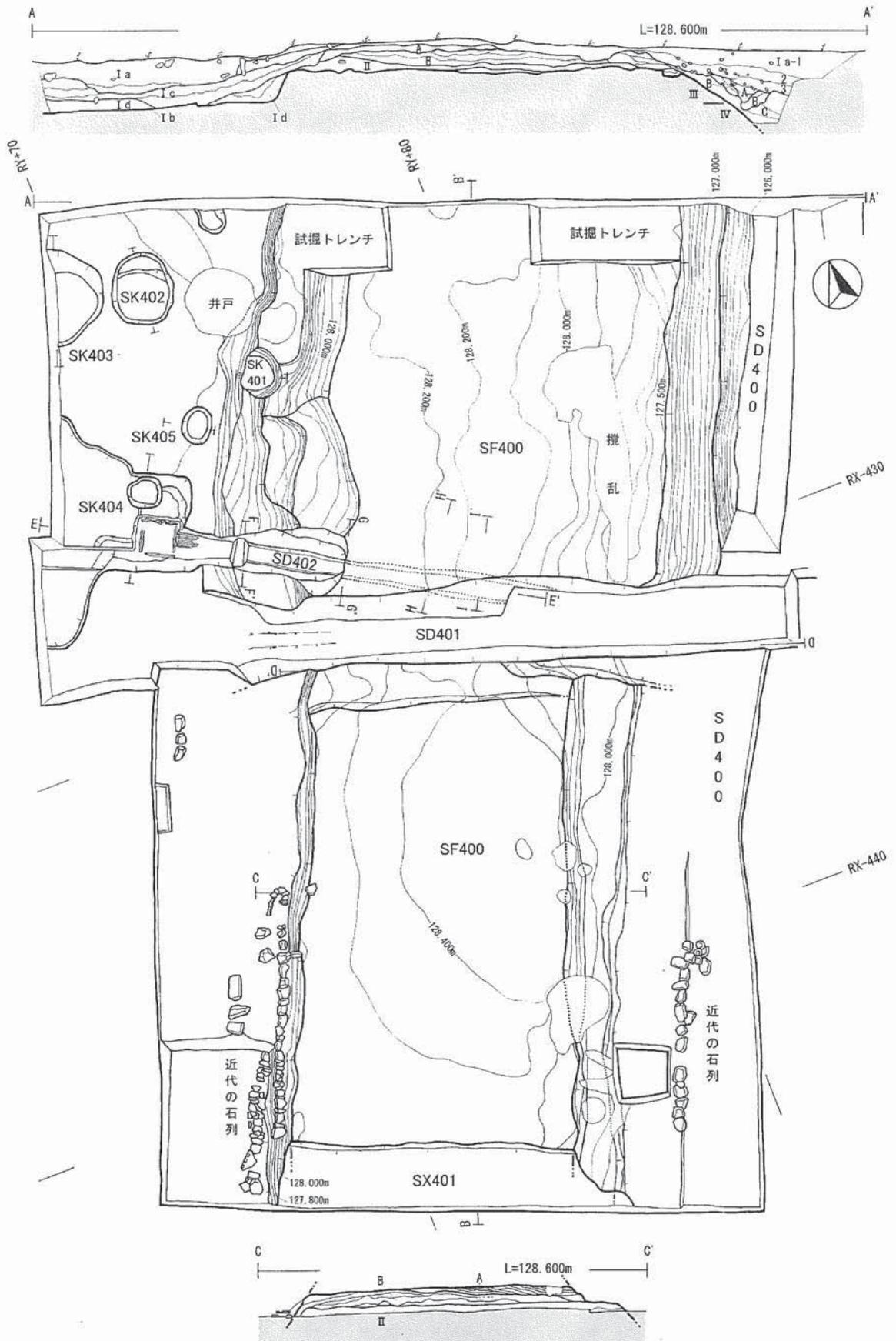
3 城郭期及び城郭期以後の遺構（第5図・6図、第1図版～第5図版）

平安時代の遺構の上に自然の黒色土層（Ⅱ層）が堆積している。この層の上に S F 400 土塁が構築されており、調査区の東側では土塁に併行する S D 400 堀が存在する。この堀の外側半分は東側の車道の下になっているため、今回の調査は堀の内側の壁の上部までを精査した。土塁の西側は削り下げられた平坦面であり、土坑群や排水溝が確認されている。

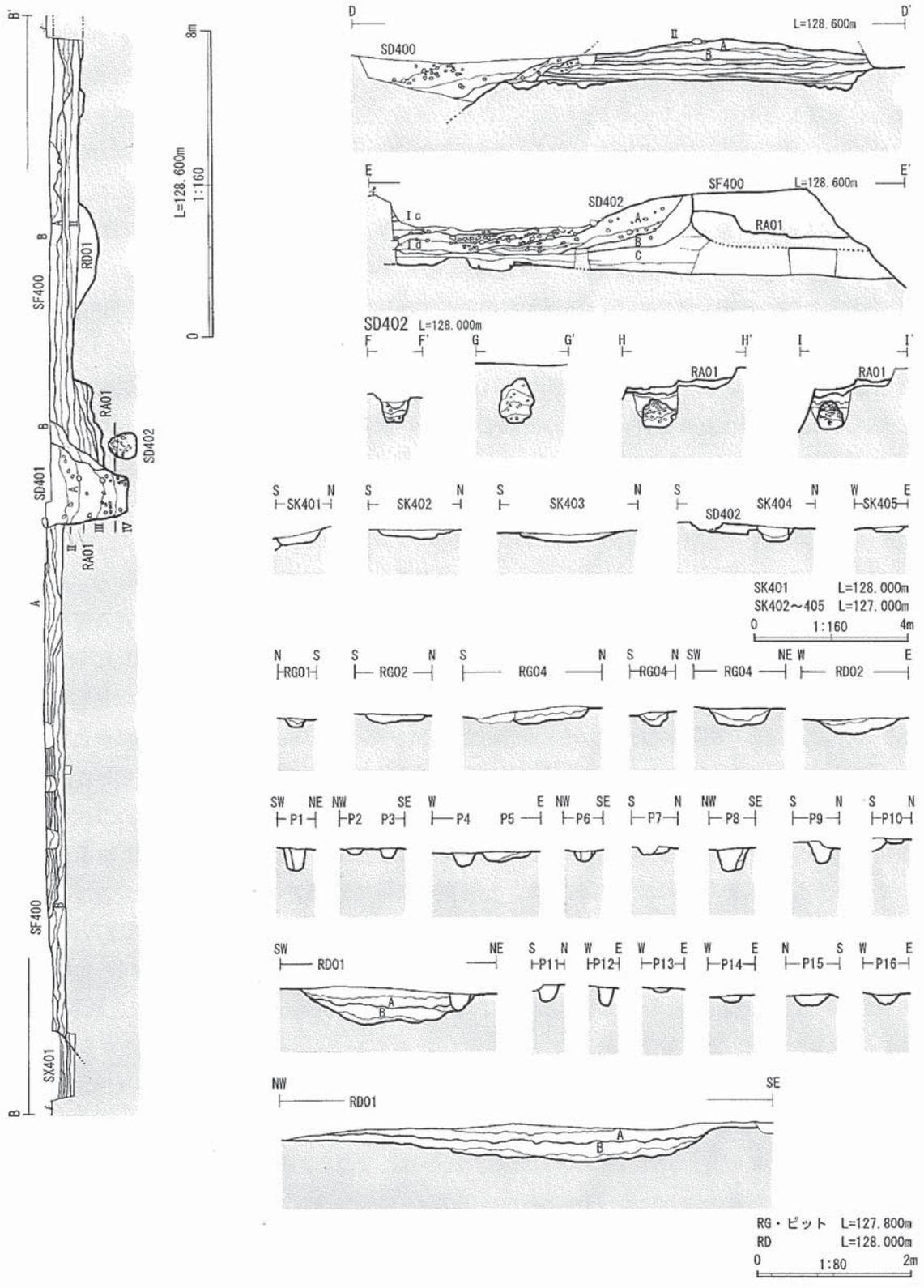
SD400 土塁

調査区中央部のⅡ層上面より構築され、SD400 堀に併行する。総延長 28m を確認している。土塁中央部は直交する S D 401 排水溝によって掘り割られている。また調査区南端部では近代以後に掘り込まれた S X 401 削平地によって削平されている。土塁の基底幅は 10.3m、Ⅱ層上の盛土は 45cm～60cm の厚さで残存する。調査区南半部の SD400 堀に面したところでは、Ⅱ層上面に幅 0.8m から 1.4m ほどの犬走りがあり、この部分には盛土層は認められない。土塁南半部盛土の幅は 8.5m である。一方北半部分では土塁東側のⅡ層上面がやや高くなっていて、明瞭な犬走りは認められず、土塁の盛土も堀の西壁近くにまで及んでいるところがある。土塁西側の削平された平坦面から、現状の土塁上面までは 1.5m 前後の比高差を認めるが、土塁の幅や形状から、本来の土塁の頂部はさらに 2m 前後高かった可能性がある。土塁直下のⅡ層上面はかなり硬化しており、盛土作業の前に入念に搗き固めた痕跡と判断される。土塁の盛土は A 層と B 層に大別される。B 層は 10cm から 25cm の層厚で盛土され、基本土は細かな黒褐色土である。これに粘性の黒褐色土や暗褐色土が粒状ないし大きな塊状になって混入している。特に土塁南半部の B4 層から B6 層では、拳大から人頭大の粘性暗褐色土の塊が多く混入し、周辺の切土や削平、堀の掘削等の発生土をそのまま運び入れ、これを粉砕することなく盛土した様子である。土塁南半部の A 層は西から東に傾斜しており、細かなところでは 4cm から 6cm の厚さで粗い版築状に盛土されている。また北半部の A 層では B 層の上に 8cm から 18cm の厚さで盛られている。A 層の土質は褐色ないし黄褐色の粘性のあるシルトを基本土とし、これに暗褐色や褐色の土粒ないし土塊が多く混入している。調査区の北半部と南半部では盛土状況に差異も認められるが、おしなべてみると B 層よりも A 層の盛土のほうが入念に行われている。土塁の西斜面は江戸時代後期以後に土取されており、壁面は凹凸が著しい。

土塁の盛土層からの図示したものでは、瀬戸・美濃の灰釉皿（第8図11）、唐津の灰釉小皿（12）、中国明時代末期の染付皿（第9図32）、永楽通寶（第11図55）が出土している。図示した以外では、縄文時代中期深鉢破片や石器、平安時代ロクロ土師器の坏破片、土師器甕の破片、赤やき土器坏と甕の破片、ミニチュア土器の破片、須恵器坏、甕の破片、瀬戸・美濃灰釉皿の底部が出土した。



第5図 城郭期の遺構



第6図 SF400土壘，SD401・402排水溝，土坑，柱穴土層断面図

SD400 堀

SF400 土塁と併走する堀である。現在調査区の東側を通じる車道は、江戸時代に堀の外側に沿っていた細い通路が前身であるが、明治以後に堀の東側（外側）を埋めて堀側に拡幅したものが現状の道路である。現在でも路面が東から西へ傾斜しており、道路の西半から SF400 土塁東辺までの部分が本来の堀幅であり、幅 11m～12m の規模となる。堀の西側の壁は 1.9m の深さまで確認したが、深さ 1.5m あたりから壁が砂礫層になり、湧水著しく道路側が崩落する恐れが生じたため、堀底の確認は断念した。堀の中の埋土は、表土下の A 層、B 層は堀の埋没途中で掘られた溝の埋土で A 層は暗青灰色土主体。B 層は暗褐色土主体。C 層は暗オリーブ褐色土と暗青灰色土の混合土である。

遺物は埋土全体から出土している。図示した遺物では瓦質陶器の瓶子（第 8 図 13）、中国色絵磁器の皿（第 9 図 35）、がある。ほかに肥前染付磁器の碗、皿、湯呑の破片、瀬戸・美濃の染付磁器破片、瀬戸・美濃の陶器破片、益子の土瓶、相馬大堀系の灰釉壺、湯呑壺、京焼風陶器の湯呑壺、鉄釉や海鼠釉の甕類の破片が出土している。埋土の下部でも 19 世紀以後の陶磁器が認められ、堀の埋土のほとんどが明治以後の堆積と判断される。

SD401 排水溝跡

RA01 竪穴建物跡と SF400 土塁を掘り割り、SD402 排水溝の一部を壊して構築されている。東側と西側は試掘調査のトレンチがほぼ重なり、プランを明確にできなかったが、土塁を掘り割る箇所では上幅で 2.2m、下幅で 0.8m、深さ 2.1m（A 層のプラン）である。底面は砂礫層（IV 層）に到達しており、一部に木樋の底部の痕跡が認められ、左右対称の位置に鉄釘が残存していた。釘の左右の間隔は 38 cm～39 cm、側面での間隔は 25 cm～36 cm である。埋土の A 層は砂礫混じりの暗褐色土ないし黒褐色土で、しまりのない軟弱な土質である。なお、この排水溝と SF400 土塁北半部盛土との間には、この排水溝に切られる掘りこみ（B 層）が存在する。この掘りこみは SF400 土塁盛土と RA01 竪穴建物跡を切っており、SD401 排水溝が変遷している可能性がある。また、後述する SD402 排水溝の陥没によって形成された落込みの可能性もあるが、土層断面のみの確認であり確定できない。

A 層からは 21 本の鉄釘や肥前、瀬戸・美濃ほか国産の陶磁器類、硝子の塊が出土している。図示したものは第 9 図 23、24 の肥前染付の碗、第 11 図 53、54 の鉄釘がある。江戸時代の陶磁器が主体であるが、明らかに明治以後の製品も含まれており、A 層は近代以後に堆積したものと判断される。

SD402 排水溝跡

調査区西側に広がる低地（自然？）から木製枡を経て SF400 土塁の地下に随道を通して堀に排水されるように構築されている。木製枡の西方はしだい幅が広くなりながら低地に移行するが、このあたりの壁や底面は沼や湿地のように青灰色に変色している。重複関係は S K404 土坑、SD401 排水溝に切られている。随道の天井は平安時代の RA01 竪穴建物跡床面よりも下を通じており、随道の陥没により、RA01 竪穴建物の床面が陥没している。木製枡は木製の板と杭で造られ、内法で一辺が 80 cm を測る。この木製枡の東側 5m ほどの範囲は天井が陥没して遺物包含層の I d 層、I c 層が溝内に落ち込んでいた。木製枡に接する溝の底面には木樋の底材が僅かに残存している。残存する最大幅は 32 cm である。随道の天井が残存するのは、SF400 土塁下の 4.9m であり、東端部は SD401 排水溝によって削られており残存しない。天井が残存する箇所では、幅 70 cm～86 cm、高さは 70 cm～110

cmである、高さに大きな変動があるのは、天井の崩落や陥没等によるものである。溝の埋土は暗褐色の土に暗オリーブ褐色の砂礫が多く混入する土で、隧道部分の埋土は砂礫が主体であった。砂礫の質はIV層と酷似している。

遺物は埋土中から第9図34の中国染付大皿、第10図38の馬櫛のほか、国産の近世陶磁器類が出土している。陶磁器の中に明治以後のものは含まれていない。

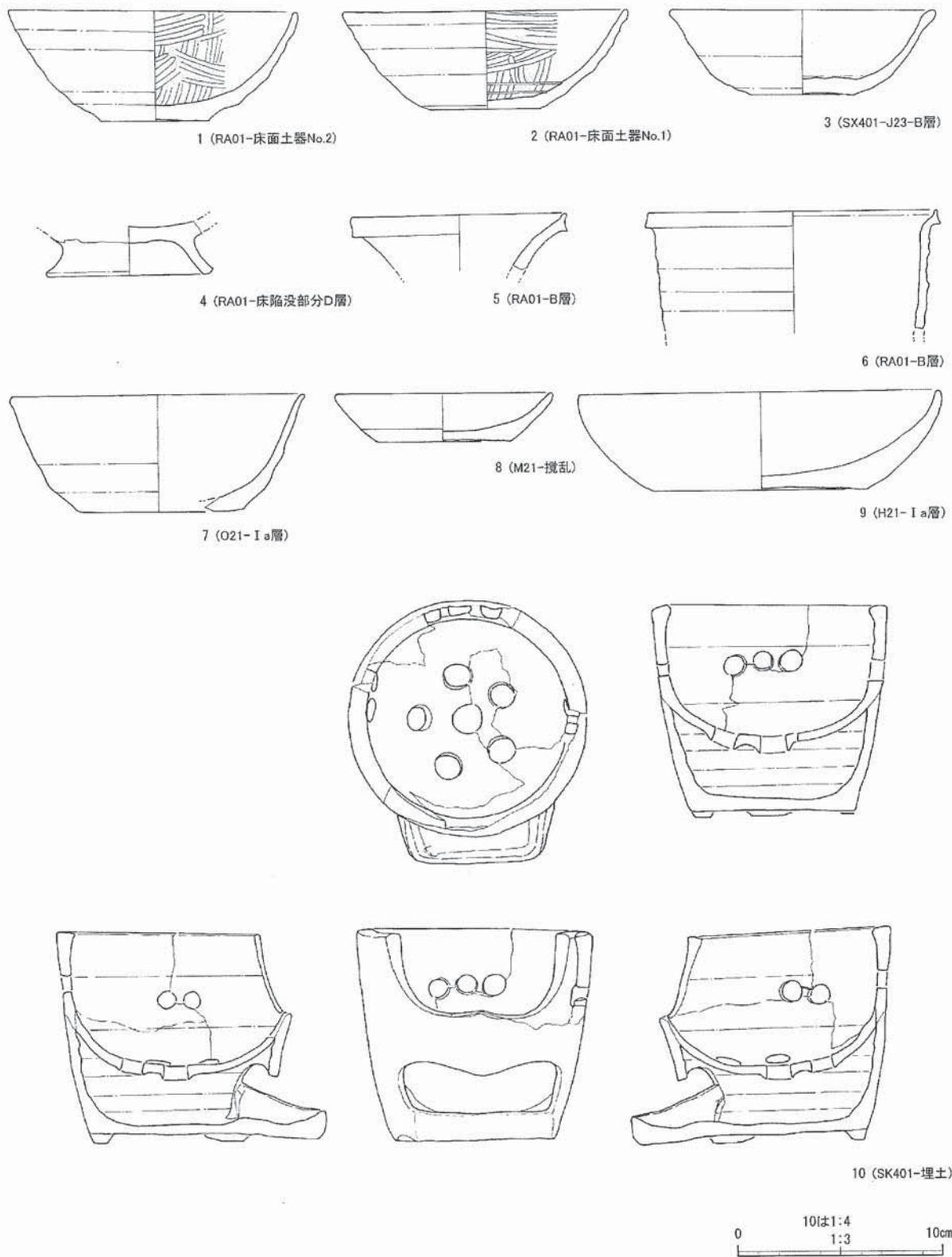
SK401、402、403、404、405 土坑

SK401 土坑はSF400 土塁西側中腹に存在し、SF400 土塁と、遺物包含層のD層を掘り込んでいる。SK402 からSK405 土坑は土塁西側の平坦面にあり、SK404 土坑はSD402 排水溝の埋土を掘り込んでいる。SK402・403 土坑は楕円形の浅い土坑であり、SK404 土坑は隅丸方形の土坑、SK405 土坑は小形の楕円形の土坑である。土坑の埋土は暗青灰色土または暗褐色土主体で、人為的に埋め戻されたものが多い。土坑内部からは江戸時代の陶磁器類のほか、箸や皿、建築部材と見られる木製品が出土している。土坑出土の遺物のうち、図示した遺物ではSK401 土坑からは第7図10の焜炉と第8図18の鉄絵土瓶、SK402 土坑から第9図25の染付湯呑碗、SK404 土坑から第9図30の肥前青磁兎形水滴と第10図41の木製箸、39の木製皿、43の把手状の木製品、44の臍穴のある部材と第11図50、51の鉄釘が出土。SK405 から第10図37の臍穴のある部材が出土している。このほかにすべての土坑から近世陶磁器類の破片が出土している。

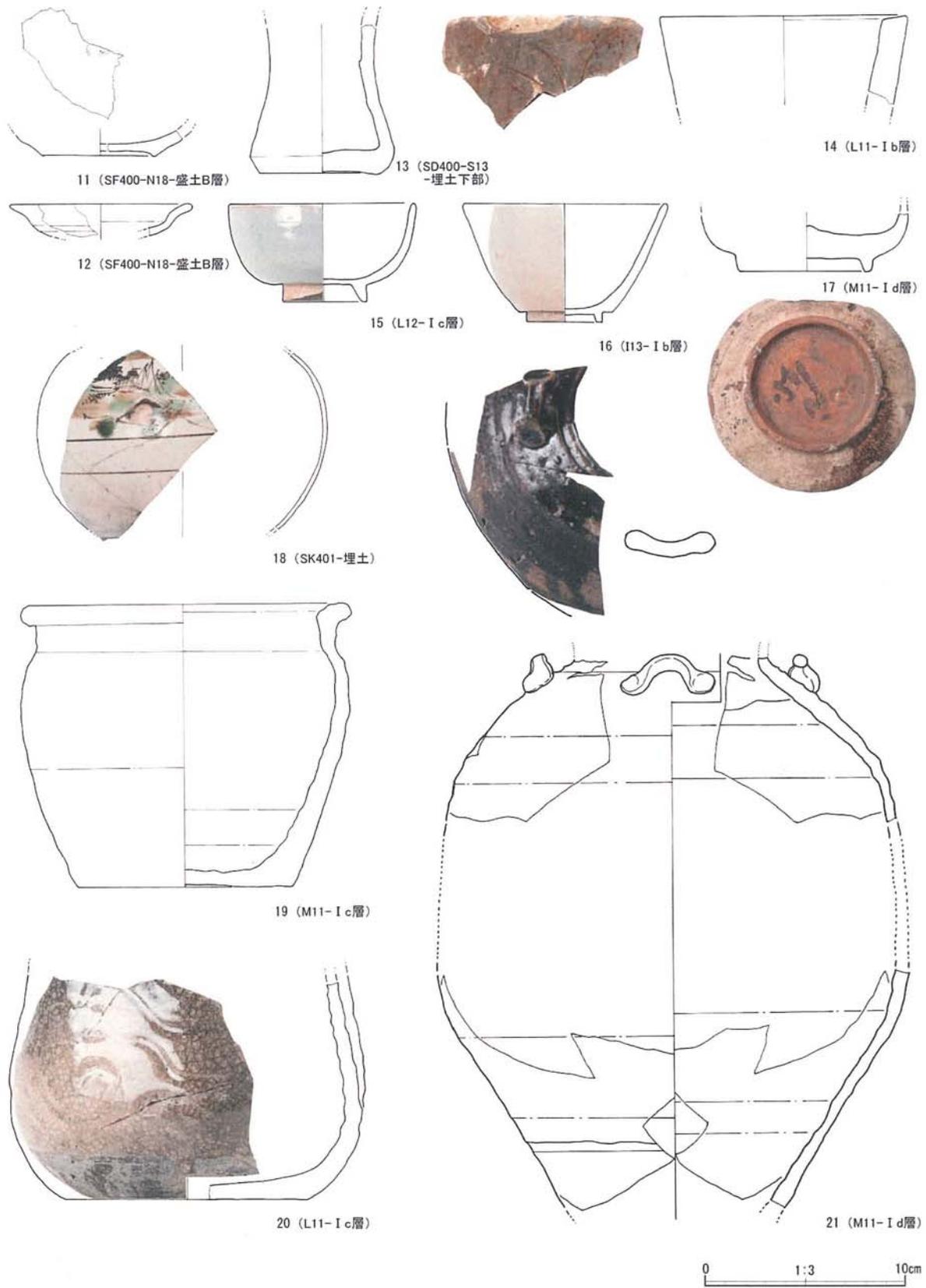
3 出土遺物（第7図～第10図、第7図版～第10図版）

第7図1・2は土師器坏で内面をへら磨きし、黒色処理されている。3は赤やき土器坏である。4は土師器高台付坏または皿で、内外ともへら磨き、黒色処理されている。5は須恵器の長頸瓶もしくは長頸壺の口縁部である。6は赤やき土器の小形甕である。7～9は近世のかわらけで、9は瓦質の大皿である。10は土器の焜炉で中底がある。底部の内面に一部焦げがあり、中底の下面は被熱して脆くなっている。中底のないものは近世遺跡で類例があり、この焜炉も江戸時代のものである。

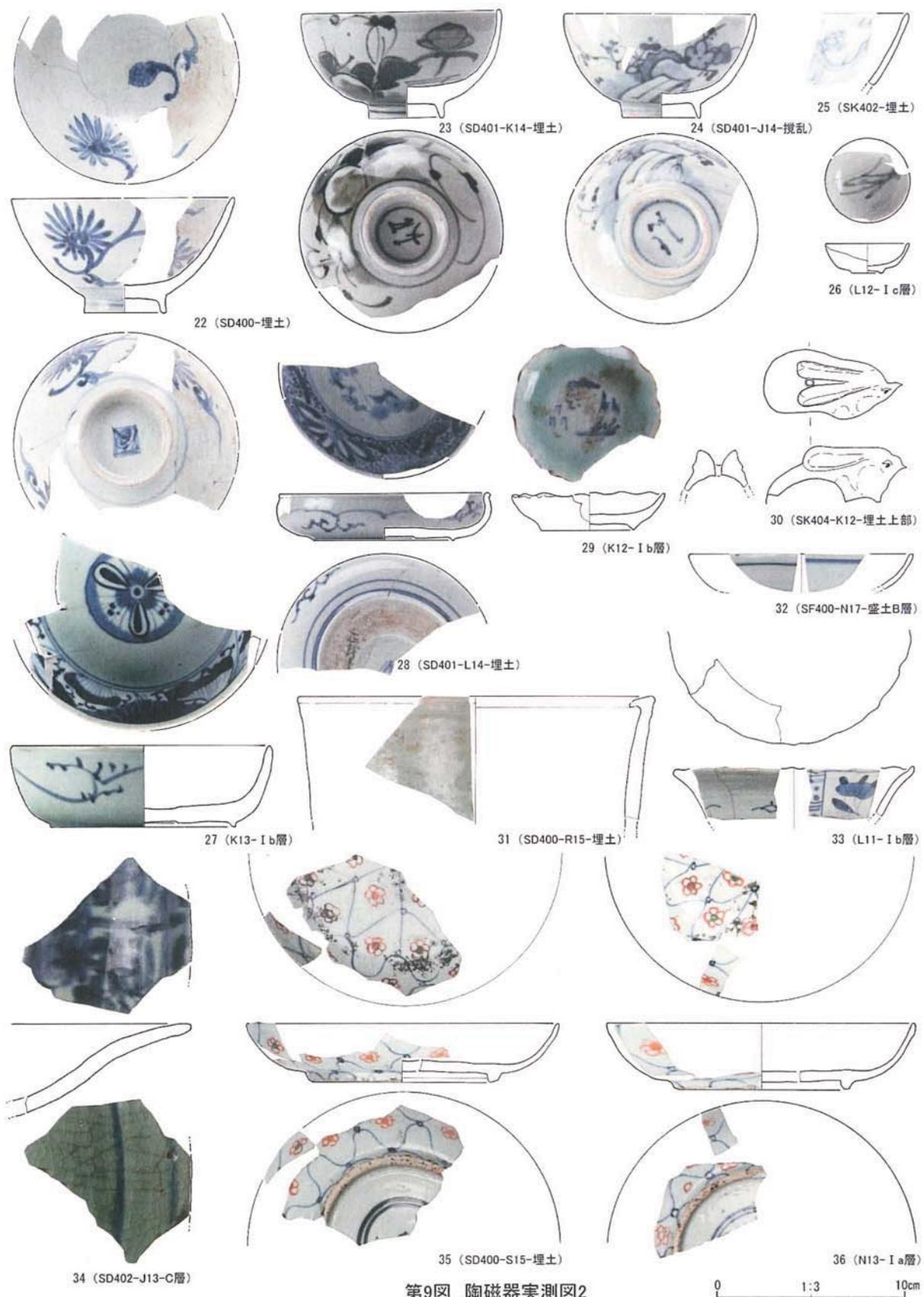
第8図11は16世紀中葉の瀬戸・美濃灰釉丸皿の底部で、見込みには花卉状の押印がある。12は唐16世紀末から17世紀前葉の唐津の灰釉小皿の破片である。13と14は江戸時代の瓦質土器で、13は瓶子の下部、14は火入れの口縁部で外面に秋草らしい線刻文様がある。15は18世紀から19世紀の薄紫色の釉をかけた湯呑茶碗、16は18世紀～19世紀の京焼風陶器の湯呑碗で、内外に透明釉が施される。17は飴釉の筒型茶碗の底部で外面に墨書が認められる18世紀から19世紀の製品。18は19世紀ごろの益子の鉄絵土瓶の体部である。19は黄土色の釉を施した小形甕で、18世紀から19世紀の製品。21は瀬戸・美濃の灰釉大徳利の破片で江戸時代の製品。唐草状の沈線文が施されて体部を押して変形させている。21は17世紀の信楽の鉄釉四耳壺である。22～24と26～31は肥前の磁器類である。22は17世紀後半から18世紀前半の染付碗、23と24は18世紀中ごろから後半の梅花文の染付碗。25は産地不明であるが竜文の染付湯呑茶碗の破片。26は肥前染付の紅皿。27と28は外面に唐草文を施した18世紀後半から19世紀の肥前染付皿で、蛇の目凹形高台。29は肥前青磁の小皿で内面見込みは簡略化された染付文様、口縁部は輪花で鉄錆の口紅を施す。80は肥前青磁の兎形水滴の破片で両耳の間に空気穴がある。31は肥前青磁の火入れの破片で、外面に線刻による草花文がある。31から36は中国染付の磁器類である。21は16世紀末から17世紀初めの染付丸皿の破片。33は17世紀前半の



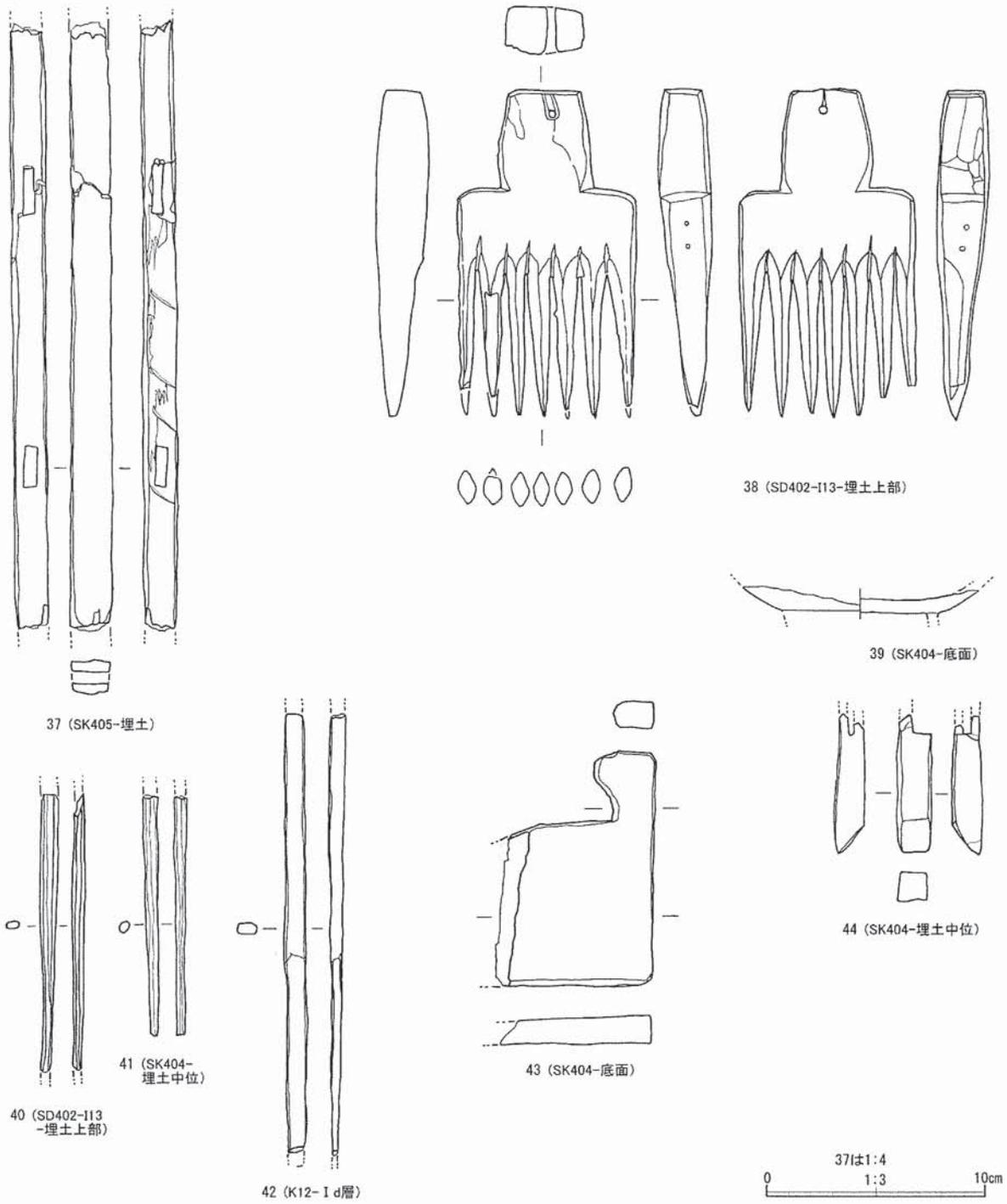
第7図 土器実測図



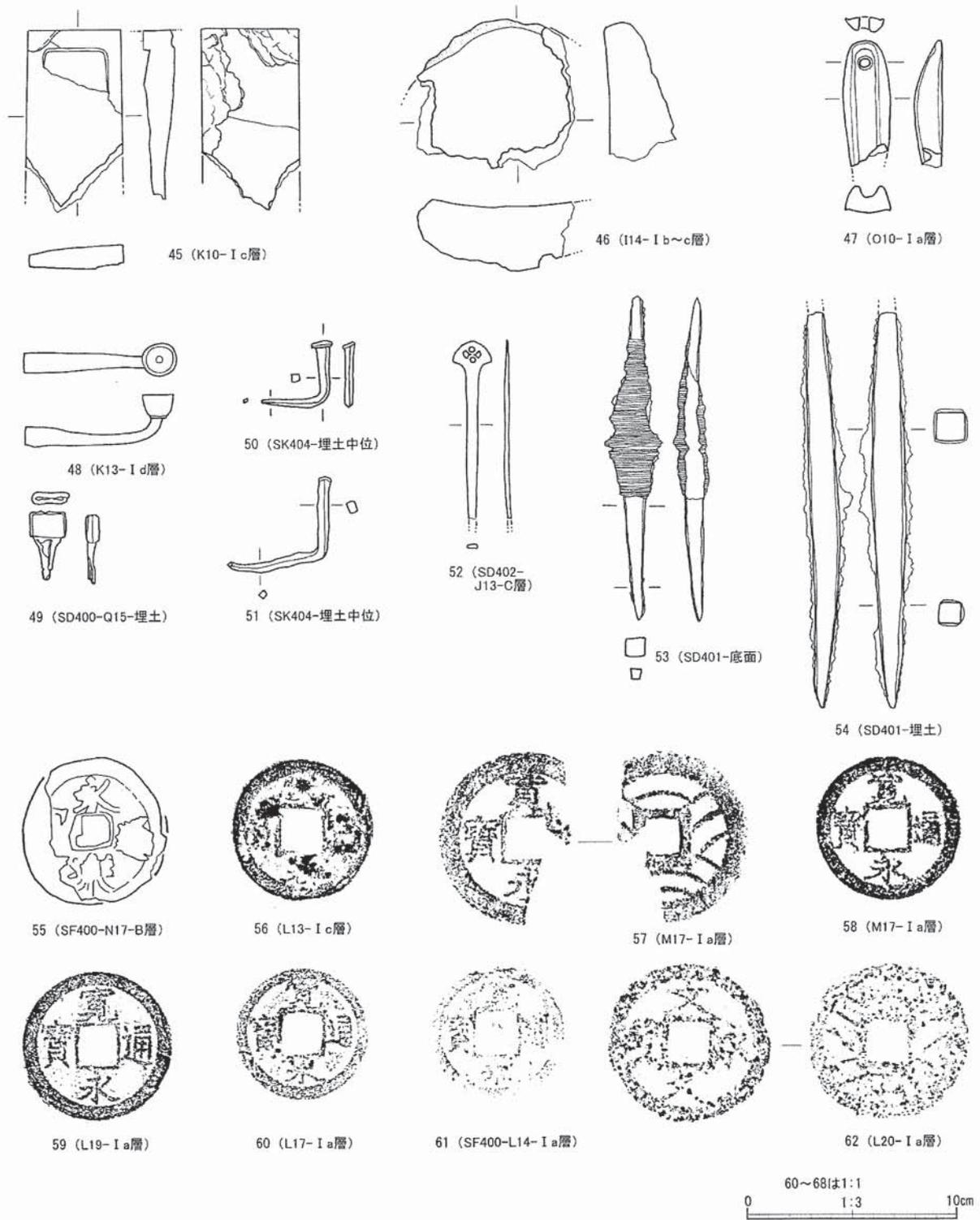
第8図 陶磁器実測図1



第9図 陶磁器実測図2



第10図 木製品実測図



第11図 石製品・金属製品実測図

遺物集計表

遺物包含層・表土出土の土器・陶磁器

	古代の土器						近世以後の土器						陶器														
	土師器		あかやき		須恵器		土器			瓦質			瀬戸・美濃	備前	肥前(唐津)			京焼風		京焼							
	杯	甕	杯	甕	杯	甕	壺	皿	火鉢	蓋	小壺	大皿	大鉢	角皿	搦鉢	瓦	德利	茶碗	皿	鉢	壺	湯呑	茶碗	壺	茶碗		
I a (表土)	18	15	19	5	3	3	6	5			1	1	1	2	1	1							1	1	2	1	2
I b	3	2	2	1					1																3		1
I c	2	2	2	1				1									1	1	1	1					3		
I d	2	3	3	1													1										
II	3	1		1			1	1				2															

	陶器																						
	相馬						産地不明陶器																
	茶碗	湯呑	猪口	小壺	向付	土瓶	土瓶	皿	大皿	壺	茶碗	猪口	蓋	鉢	小鉢	搦鉢	壺	甕	大甕	德利	大德利	土瓶	
I a (表土)	2	1	1	1	1	1	11		2	2	2	1	1	2	6	1	7	1	3				1
I b	1	1		1			1		2		1			1	2		5						1
I c	2						1		2	1					2		2						1
I d						1																	1

	磁器																									
	肥前												産地不明													
	染付						色絵						白磁						青磁							
	皿	大皿	輪花皿	角皿	湯呑	猪口	小鉢	碗	茶碗	蓋	湯呑	鉢	小鉢	大鉢	油壺	德利	瓶子	湯呑	水筒	猪口	水筒	小鉢	輪花皿	花生	火入	
I a (表土)	11	1	4	1	4	2	1	22	1	3	1	2	2	1	2	6	1	1			1		1			
I b	11		1		1	2		7								1	1				1		1	1	1	
I c	1		1		1	1	2	12		1						1						2				
I d	3	1			1	2		7													1					

	磁器																			
	瀬戸・美濃													中国						
	染付												染付色絵							
	皿	大皿	輪花皿	角皿	湯呑	猪口	小鉢	碗	茶碗	蓋	湯呑	鉢	小鉢	大鉢	油壺	德利	瓶子	大皿	皿	
I a (表土)				1	4		1	1												1
I b					2			4												
I c					4			1	1											
I d																				

	磁器																								
	国産(産地不明)染付等																								
	染付												色絵		白磁										
	皿	輪花皿	角皿	湯呑	猪口	蕎麦猪口	碗	茶碗	蓋	湯呑	鉢	小鉢	大鉢	油壺	德利	瓶子	花瓶	紅皿	水筒	碗	角皿	碗	蓋	猪口	
I a (表土)	9	1	2	2	1	3	14	4	1	1	1	3	2	1		1	2			1				1	2
I b	4		2	3			4			1	1	1			1					1					
I c	2		1	3			10	2											1						
I d							2												1						

遺構出土陶磁器

器種	磁器																								
	肥前												産地不明												
	染付												色絵						白磁						
	九皿	皿	輪花皿	角皿	大皿	紅皿	碗	茶碗	蓋	湯呑	鉢	小鉢	大鉢	油壺	德利	瓶子	花瓶	紅皿	水筒	碗	角皿	碗	蓋	猪口	
SF400																									
SD400			7	1		1	8	1	1	4	1	1		1					1						1
SD401	2	14	3	1	5		11	6		1				2	2				1	1	14	4	2	3	2
SD402							6			1		1													1
SK401			1																						
SK402		1					3		1																
SK403																	1								
SK404			1	1			2													1					1
SK405							1																		
SX401																									

器種	瀬戸・美濃													国産染付						中国染付			
	湯呑	茶碗	皿	八角皿	角皿	鉢	碗	茶碗	蓋	土瓶蓋	湯呑	段重	油壺	壺	德利	瓶子	茶碗(脚)	皿	色絵皿	大皿			
SF400																		1					
SD100				1	1	1		1	1			5				3			1				
SD401		1	2			1	3			1	2		1	1	3	1	1						
SD402	2						2						1										1
SK401													1	1									
SK402							1																
SK403																							
SK404																							
SK405																							
SX401																							

器種	京焼風		瀬戸・美濃				備前		相馬				益子		常滑		信楽		国産陶器									
	茶碗	湯呑	壺	茶碗	皿	輪花皿	大皿	搦鉢	壺	搦鉢	湯呑	辨分茶碗	灰種茶碗	灰種壺蓋	土瓶	土瓶	土瓶蓋	壺	壺	灰種茶碗	灰種壺	鉢	土瓶	天輪	甕	壺	德利	
SF400						2																						
SD400	1	2	1				1	3	1		3	1		1	1	2	1	1					1	1		2	1	
SD401	8	3		2		1		1	2	2	2	2	1										1	1	1	3	1	1
SD402	1																	1										
SK401							1											1										2
SK402	1																											
SK403																												
SK404																												
SK405																												
SX401																												

IV 総括

盛岡城遠曲輪跡の土塁と堀は、明治以後の市街化によって平坦になり、今日の地上ではほとんどうかがい知ることはできなくなっている。その中で、今回の調査地点は、地表の僅かな起伏によって土塁の存在をうかがうことができる数少ない場所であったとともに、比較的まとまった調査範囲であったため、遠曲輪土塁の規模や構造が明らかになった。

SF400 土塁は基底部の幅が 10.3mあり、その東西両側を削り下げて、土塁の基壇ともいべき基底部を造り出していることが判明した。その上に盛られた土塁本体は、60cm前後の厚さで残存しており、西側の平坦面からの土塁の残存高は 1.5mであった。土塁法面の傾斜や、土塁上面馬踏みが大凡二間と仮定した場合、当時の土塁頂部まではさらに 2m程度の高さがあったと推定され、西側低地からの比高差は二間、約 3.6m程度と推定される。また、土塁に併行していた SD400 堀については、大半が調査区外のため、内側の壁だけの調査であったが、地下 2mまで掘削して壁の傾斜を確認するとともに、堀の壁面では地山のシルト層の下に中津川河川敷の砂礫層が存在することが判明した。すなわち、この付近は中津川によって運ばれた砂礫層とその上に形成されたシルト層とが堆積した地質であり、土塁基底部の造り方からみて、中津川に併行するように形成された中州の高まりを活用しながら、これを削り出して土塁の基底部を造り、この上面を搗き固めた後に、堀の掘削と基底部の削り出しで発生した土を盛り上げて土塁を構築していたのである。この土塁の下部に積まれた土には、粘性の強い暗褐色土の塊が数多く混入しており、先述の掘削作業で発生した土をそのまま盛り上げた状況が見て取れた。そのあと、土塁本体をさらに高く構築する際には、黄褐色シルトや褐色シルト、粘性のある暗褐色土を混合して、しまりの良い土を作り、これを粗い版築状に搗き固めながら土塁上部を形成している。土塁の構築土からは 16 世紀の瀬戸・美濃灰釉丸皿や 16 世紀末から 17 世紀初めの唐津灰釉小皿、明末期の染付皿の破片、永楽通寶の鏹銭が出土している。これにより土塁構築の上限は 16 世紀終末あたりに位置づけられる。このうち瀬戸・美濃灰釉丸皿や中国明末期の染付皿は、南部氏の盛岡築城以前に遡り、戦国時代に不來方の領主であった福士氏に関連する遺物と推定できる。福士氏の不來方城そのものは江戸時代の盛岡城の御城内（内曲輪）と外曲輪の範囲内であるが、陶磁器の出土はここが無住の地ではなく、不來方城下の拡がりの一部であったことの傍証となる資料ではなからうか。

土塁西側の郭内は、地山のシルト層（Ⅲ層）を削り取り、Ⅳ層近くまで削り下げて平坦地を造っている。そこは自然低地を含む湿潤した場所であり、この水を東側の堀へと排水するために、土塁下の随道に木樋を差し込んで暗渠排水溝（SD402）を造っている。随道の内部には砂礫を主体とした土砂が流入し、さらには木樋の不朽と随道部分の陥没も手伝って、江戸時代後期ごろまでには排水不能となっていた。このため南側に土塁を掘り割り、底面に木樋を埋設して新たな暗渠排水（SD401）としたのである。この新しい排水施設も、江戸時代の末以後に通水不能となったものか、木樋の上の土を大きく掘削し、木樋を除去していた可能性がある。この内部に堆積した砂礫混じり土（A層）は明治以後の土砂であることは出土遺物からも明らかである。調査前に存在した三明院本堂はこの SD401 排水溝を埋めた後に建てられた堂宇であり、建築の上限は明治年間ということになる。

この郭内側に堆積した土層のうち、I c 層と I d 層には明治以後の陶磁器は見いだせない。ただし

I d層からも幕末ごろの陶磁器が認められることから、幕末期かそれ以後の堆積土である。この遺物包含層と土塁東側の堀、これらを覆う表土からも、多くの土器や陶磁器類、金属製品、木製品、石製品が出土した。陶磁器は江戸時代の18世紀から19世紀にかけての肥前や瀬戸・美濃の染付磁器類、相馬や益子の陶器類が多く出土し、産地不明の陶磁器類も多い。また、量は少ないが、江戸時代前期の17世紀の信楽の四耳壺や中国染付、色絵の皿類が出土している。網目文の色絵の花弁を施した皿は、盛岡城跡の腰曲輪に堆積した寛永13年(1636)の本丸火災の焼土層からの出土遺物に類例がある(盛岡市教育委員会1998)。これらは輸入陶磁器など的高级品を保有できた富裕層の居住を物語る。

感應山神通寺三明院は江戸時代から存在した修験の寺院である。城下の加賀野からこの地に移転したのは、宝暦3年(1753)のことであった(盛岡市仏教会1995ほか)。調査前に存在した本堂と庫裏は土塁の真上に建てられており、明治初期に土塁を崩してから後の建築である。江戸時代の堂宇は土塁西側の平坦部のどこかに存在したと推定されるが、今回の発掘調査では建物跡は明確にはできなかった。なお、土塁の東西両面に近代の石列が確認されている。西側では南半部の石列のみ図示したが、西側北半部の土塁中腹のI c層上面にも石列が存在した。これらは明治から昭和期にかけて、土塁西側に盛土を繰り返しながら寺院の敷地が変遷したことを示している。土塁西側に存在するSK401~405土坑とその出土遺物は、江戸時代後期の三明院に関連している可能性もあるが、今回の調査だけでは確定できない。今後の周辺調査の課題である。

註1 築城開始の年次については文録2年(1594)、慶長3年(1598)など諸説存在するが、ここでは慶長2年(1597)3月6日に不來方新築城鋤初(鋤初)とする「祐清私記」に従った。

2 国立国会図書館内閣文庫所蔵(重要文化財)

引用・参考文献

- 盛岡市教育委員会1998「発掘調査報告編」(『史跡盛岡城跡I』)盛岡市・盛岡市教育委員会
盛岡仏教会1995「感應山神通寺三明院」(『盛岡の寺院』)盛岡仏教会
伊藤祐清1749「祐清私記坤 盛岡築城之事」「同朝鮮御征伐之時信直公御出陣之事」「同御城御築之儀秀吉公より御免之事」(『南部叢書第三冊』6)南部叢書刊行会(1928)
伊藤祐清1749「祐清私記坤 利直公御事」(『南部叢書第三冊』)南部叢書刊行会(1928)
森嘉兵衛1956「第一章近世南部藩の成立第二盛岡城下の建設」(『盛岡市史第三分冊一近世期上』)盛岡市
吉田六太郎偏1978(『もりおか物語(八)一肴町かいわい』)熊谷印刷出版部

報告書抄録

ふりがな	もりおかじょうとおくるわあと							
書名	盛岡城遠曲輪跡							
副書名	第15次発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	室野秀文 神原雄一郎 佐々木紀子							
編集機関	盛岡市遺跡の学び館							
所在地	〒020-0866 岩手県盛岡市本宮字荒屋13番地1 TEL019-635-6600							
発行機関	平井明子 盛岡市教育委員会							
発行年月日	2015年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号	世界測地系				
もりおかじょうとおくる わあと 盛岡城遠曲輪跡	いわてけんもりおかし 岩手県盛岡市 しんめいちじょう 神明町1-1	3201	LE06 - 2389	39° 42' 3.9"	141° 9' 26.1"	2014. 7. 17 ~ 2014. 8. 31	503 m ²	共同住宅 の建築 及び造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
盛岡城遠曲輪跡 (第15次調査)	散布地	縄文時代中期～後期	竪穴建物跡1		縄文土器・石器		盛岡藩主南部 氏居城盛岡城の 総構えともいう べき遠曲輪の土 塁と堀を中心に 発掘調査を実 施。土塁の規 模、構築方法、 暗渠排水施設が 明らかとなっ た。	
	集落	平安時代	土坑2・溝4 柱穴及びピット15		土師器環、高台付坏、 内外黒色高台付坏、須 恵器、			
		戦国時代			瀬戸・美濃灰釉皿、唐 津小皿、			
	城郭	戦国時代末～近世	土塁1・堀1 土坑5 暗渠排水溝1		瀬戸・美濃、信楽、 京、肥前、備前、京、 相馬、益子等の近世陶 磁器類、木製品、石製 品、金属製品、硝子 壺、			
		近代	削平地1 石列5					
	要約	中津川東岸の自然堤防（中州）に立地する縄文時代散布地、平安時代集落跡、近世城郭跡。遠曲輪の土塁と下層から戦国時代末から近世初頭の陶磁器が出土しており、土塁と堀構築の上限は16世紀終末ごろ。西側郭内は低い土地で、土塁下に暗渠の木樋を通し、低地の水を外の堀へ排水している。城郭期、城郭期以後の遺構と遺物包含層からは、中国染付、国産の瀬戸・美濃、相馬、益子、京焼の陶器類、肥前の染付磁器類、木製品、石製品、金属製品、銭貨が出土している。						



試掘調査トレンチと南半部調査状況



北半部調査全景

第 2 図版



S F 400 土塁南半部（北から）



S F 400 土塁南半部土層断面



S F 400 土塁北半部（南から）



S F 400 土塁北半部土層断面（南東から）

第 4 図版



S D400 堀, S F 400 土塁 (東から)



S D400 堀 (南から)



S D402 暗渠排水溝（西から）



遺物出土状況

第 6 図版



古代の遺構



RA01 竪穴建物跡（北東から）



平安時代の土器



近世の土器



焜炉



焜炉（上から）



中国染付，色絵，瀬戸・美濃，唐津



信楽四耳壺

第 10 図版



近世陶器



肥前染付

盛岡城遠曲輪跡

第 15 次発掘調査報告書

平成 27 年 (2015) 3 月 31 日

編集 盛岡市遺跡の学び館

〒020-0066

岩手県盛岡市遺跡の学び館

電話 019-635-6600

発行 平井明子 盛岡市教育委員会

印刷 有限会社ツーワンライフ